# 観経疏大意

底　本　森　英純　校訂本

対校本　石　石黒観道本　（石黒観道所蔵本を森英純が写したもの）

西　西山教義研究本　（「西山教義研究」第一年第一号附載、大正十一年発行）

安　安井広度本　（「法然聖人門下の教学」附載、昭和十三年発行）

如　如来寺本　（龍野如来寺所蔵）

＊　石安如は漢文体、西は延べ書きである。

本文中のゴシック体の文字と（　）内の文字とは編者加筆。

# 観経疏大意

西山善峰寺沙門證空記

## 総説

先づ念仏宗とは、諸経[1]を会して観経に入るるなり、諸善を開して念仏に摂す。定散相分[2]かつこと八万四千[3]、能く念仏の一行を詮す。弘誓多門[4]四十八、専ら念仏の一願を標す。諸善を能詮と号し、念仏を所詮と名づく。此の分別の智を以て観解と名づく、十六観門是なり。此の観門の智を発して弘願[5]に帰す、念仏三昧是なり。能詮・所詮は猶分別の義[6]、観門・弘願は開会の釈なり。此の四の道理は相離れざる法なり。而して、四の道理有りと雖も、合して之を論ぜば、詮要[7]は二なり。和尚九巻[8]の義、料簡、此くの如し[9]。此の上に問答を致して、弥、一宗の大旨を演べん。

①右如経＝「教」
②右安分かつこと＝「分たること」
　如「分れたること」
③右如四千＝「四千也」
④右多門＝「多門にして」
⑤右西安弘願に……三昧＝「帰二弘願念仏三昧一」
　如「帰弘願念仏三昧」
⑥右安如義＝「義也」
⑦右西安詮要は二なり＝「詮要二也」
　如「詮要二也」
⑧右西安九巻の義＝「九巻義の」
⑨右安如此く＝「右」

**第一問答**

問ひて曰く。善導和尚は、八宗の中、何れの宗の人師なりや。

答へて曰く。何宗の人師なりと云ふ事、分明ならず。[1] 但し、[2] 一[註1]代の聖教を披きて釈尊の本意を験らむるに、五濁五苦の凡夫の為に、西方無勝の国を捨てて、南浮濁悪の界に入ると見えたり、然るに、凡夫の乱想[3]を以て生死を出づる事は、念仏三昧に帰するの外、全く他[4]の方便無しと意得、観経の本意に任せて、諸経の現文を料簡[5]し給[6]ふなり。

**第二問答**

問ひて曰く。諸宗[7]の人師、観経を釈する事、蓋し多し。何[8]んが故に、諸師の解釈に異なり、別に一宗を立つるや。

答へて曰く。諸宗の人師、釈を造る事、実に多し。然りと雖も、皆、自宗の意を以て観経を釈[9]するなり。所謂、天台宗は法華に依りて宗を立つるが故に、今[註2]経を法華の意に釈し入れ、華厳宗は華厳を

---

①㊀分明ならず＝「不二分別明一」
　㊁「不二分一明」
②㊀但し＝なし
註1　主語は善導和尚。
③㊀㊁想＝「相」
④㊀他の＝なし
⑤㊁料簡＝「断簡」
　側註に「料簡か」
⑥㊁給ふ＝「結」
⑦㊁宗＝「家」
⑧㊀㊀㊁何＝「如何」
⑨㊀㊀㊁釈するなり＝「釈し入るるなり」
註2　観経をさす

以て宗を立つるが故に、今経を華厳の意に釈し入る。諸宗の人師、皆以て此くの如し。一両を挙ぐ、余は知るべし。然ればば①、導和尚は観経に依りて宗②を立て、諸経を今経の意に釈し入れ給ふに、何の失か有らんや。之に依りて、山家[註1]の大師、諸師の、自宗を以て諸経を釈し入るる事を釈して曰く、「玄賛[註2]の家[註3]には、法華の旨を会して唯識の義に帰す、是即ち、唯識宗を弘めて法華③を弘むることを知らず。無相の家には、法華の旨を会して無相の義に帰す、是即ち、無相宗を弘めて法華④を弘むることを知らざるなり。是の故に、天台一宗⑤は、一切経を会して法華経⑥に帰せしむ。是即ち、数々、法華委曲の義を揚ぐ、具には玄疏に出でたり」文。此の釈を以て例知するに、諸師の解釈は、皆、自宗の意⑦を以て諸経の旨を判属するなり。和尚独り観経の深義を得、諸経を会して一宗を立て給ふなり。

### 第三問答

問ひて曰く⑧。彼の聖道にも、浄土に生ずと談ずるなり。今何ぞ、

①石安然ればば＝「然るに」
②石宗を立て＝「宗を立つるが故に」
註1 伝教大師をさす
註2 伝教大師法華秀句巻下の取意
註3 唐の窺基
③石安如法華を……知らず＝「弘く法華を知らず」
④石安如法華を……知らざるなり＝「弘く法華を知らず」
⑤石安如宗＝「家」
⑥石経＝なし
⑦石安如意＝「立思」
如側註に「意」
⑧安如曰く＝なし

彼に違して、別して一宗を立つるや。若し爾らば、聖道と浄土と其の差別、如何ぞや。

答へて曰く。聖道門は[1]機に随ひて法を判じ、今は法に随ひて機を判ずるなり。機に随ひて法を判ずとは、所謂、娑婆穢悪の機の前には劣応身を現じ、見[2]・思を断ずる者の為には勝応身を示し、初地・初住より報身を見る[3]者は、一分無明を断じて一分中道を顕はすなり。乃至、等覚の菩薩は、未だ元品の無明を断ぜざるが故に、中道の至極を見ざるなり。因位の所見を他受用報身と名づけ[4]、等覚の菩薩も、猶、自受用身を見ずと云ふ[5]。此くの如く機に随ひて判じて、仏の功徳に勝劣有りとする[6]が故に、四種の仏土を立てて、安養をば、凡天・二乗の生ずるが故に、同居の浄土と云ふなり。同居の浄土と云ふが故に、観音授記経[註1]に云く、「阿弥陀仏に入涅槃の時有り」文。此れ同居[7]の浄土と云ふ方を云ふなり。今、浄土宗[8]には報身・報土と云ふなり。或は、大乗同性経[註2][9]の「浄土中に成仏する[10]は、悉く

①安如は＝「と云ふは」
②石見・思を断ずる者＝「断見思之者」
安如「断見思之者」
③西安る者は＝「るは」
如「者」
④石安如名ずけ＝「名也」
⑤石云ふ＝「云者ゝ」
西「云ふは者」
安如「云者」
⑥安する＝「云ふ」

註1 観経疏玄義分二乗門に引用す。
⑦安如同居の浄土＝「同居土」
⑧石安如には＝「云者」
⑨石大乗……為し＝「大乗同性経を引きて」「」の文を証拠と為す」
註2 安楽集に引用す。
⑩西安成仏するは＝なし

是れ報身なり」の文を引きて証拠と為し、其の上に、大経の文を引き、「因位の時、四十八願を発し、一一に願じて言く、若し我、[註1]仏を得たらんに、十方の衆生我が名号を称して、我が国に生ぜんと願じて、下、十念に至るまで、若し生ぜずんば正覚を取らじと、今既に成仏し給へり、即ち是れ酬因の身なり」文。此の文の意は、真実に仏は万行万善に酬いて正覚を成ずる報身なりと云ふか。此の証拠の上に、観経の「阿弥陀仏及び化仏と」[註2]の文を引きて証と為すと見えたり。阿弥陀仏と云ふ外に、化仏と云ふ文あり。知んぬ、報身（と）化身と云ふ事を。今、和尚は、三身の名を立てて、法・報・化と立て給へり。然るに、仏陀扇陀所訳の摂論[註3]には、「真身・報身・応身」文。真諦所訳の摂論には、「自性身・応身・化身」文。「前翻の報を応と為す」[註4]と云ふは、仏陀扇陀の所訳を云ふなり。「後翻の応を報と為す」[註5]と云ふは、真諦所訳の論なり。報・応の異名有りと雖も、皆、第二の身なり。其の報・応の異名を釈する

註1 観経疏玄義分
①石若し我、……至るまで＝「若我乃至」
酉安如「若我得仏乃至」
②酉万行万善＝「万善万行」
③石安如成ずる＝「成ずると云ふは」
酉「成ずるの」
註2 観経散善段取意
④石如あり＝なし
安「なり」
⑤安如訳＝「釈」側註に「訳か」
⑥石酉安如摂＝「経」
註3 摂大乗論をさす
⑦石酉安如摂＝「経」
註4 観経疏玄義分二乗門
⑧石報を応と……後翻の＝なし
註5 観経疏玄義分二乗門

に、「報[註1]とは、因行虚しからず、定んで来果を招く、果、因に応ずるを以ての故に、名づけて報と為す。又、三大僧祇に修する所の万行は定[1]んで菩提を応得す、今既に道成[2]ず、即ち是[3]れ応身なり[4]。斯乃ち、過・現の諸仏(に)三身を弁立するに、斯を除きて已外、更に別体[5]無し[6]。縦使(たとひ)、無窮の八相・名号塵沙なるも、尅体して論[7]ずれば衆べて化に帰して摂す、今、彼の弥陀は現に是れ報なり」文。今(の)解釈の意、真実報身と云ふ事、分明なり。但し、真実報身と云ふ上には、二の難[8]有り。一には、「報身[註2]は常[9]住にして永く入滅せず。何[10]が故ぞ、観音授記経には、阿弥陀仏に入涅槃の時有りと説くか」と問へり。之を会するに、大品経[11]の涅槃非化品[12]等[13]の文を引きて証と為し、「入[註3]の義を論ずる事は応身の相なり。此即ち、報身の上[14]の所現の相なり。入滅の相を現ずる事は、新発意の菩薩の為に之を現ず。故に、報身と云[15]ふ上には、入滅の相を現ずと雖も、其の失無きか。一切諸法乃至涅槃、常住にして空の故に入滅の義無し。此[17]れ新発意

註1 観経疏玄義分二乗門
①石宮定んで……応得す＝「定んで菩提を得べしと云ふが如きは」 如「如定応得菩提」
②宮成ず＝なし
③石宮如是れ＝なし
④石宮如なり＝なし
⑤宮斯＝「斯なり」
⑥石体＝「別」
⑦石宮如論ずれば……摂す＝「論ずれば化に帰す」
註2 観経疏玄義分二乗門
⑧石如有り＝「有也」
⑨石宮如常住にして永く＝「常住身」
⑩石宮如何が故ぞ＝「何ぞ」
⑪石如経の＝なし
⑫石如品＝「経」
⑬西等＝なし
註3 観経疏玄義分二乗門の取意
⑭石宮如の＝「に」
⑮石宮云ふ＝「云ゝ立ゝ」 如「云立」
⑯石一切……涅槃＝「一切の諸法は乃至涅槃まで」 宮「一切諸法乃至涅槃まで」
⑰宮如此＝「此の」

の菩薩の為に入滅の相を示すなり」（取意）。然云ひて、実の報身入滅とは云ふべからざるなりと答へ（た）り。二には、「彼の仏及び土、[註1]既に報と言はば、報・法は高妙にして小聖すら階り難し、垢障の凡夫、云何ぞ入るを得ん」文。答に、「若し衆生の垢障を論ぜば、[註2]実に欣趣し難し、正しく仏願に託して、以て強縁と作すに由りて、五乗をして斉しく入ら使むることを致す」文。今（の）釈の意は、安養世界は実報土と云ふ事、分明なり。「若し爾らば、報土と云ふは、周円無際の土にして、永く凡夫・二乗は生ずべからず、地・住以上の菩薩の、無明を断ずる人の所居なり。然るに、極楽の相を見るに、凡夫を以て其の機根と定めて、微少の善根を簡ばず、女人・悪人を捨てずと見えたり。此の義を如何が通釈せむ」と問へり。答に、「疑難、実に然るべし。若し聖道教の説の如くんば、実に此の機根は生ずべからず。今は、願力を以て成ずる所の土なるが故に、凡夫、願力に乗じて彼の土に生ず。是を極楽と名づけ、是を弥陀と

註1　観経疏玄義分二乗門
①石安如仏＝「体」

註2　観経疏玄義分二乗門
②如明＝「別」
③石と＝「を」
如なし
④石凡夫＝「凡夫も」

号するなり。故に、願力を離れて極楽に生ずる事、惣じて以て之有るべからず。」（と）。譬へば、辺鄙の、王宮を望むも、王と同坐するが如き事、惣じて以て有るべからざるなり。亦、王の宣を蒙らば、昇殿せむ事、勿論なり。今の凡夫も亦、此くの如し。未だ八十八使の見惑（を）も断ぜず、八十一品の思惑をも除かず、況んや、四十二品の無明に於てをや。是くの如きの凡夫、豈に実報土に生ずべけんや。然るに、如来の宣を蒙りて、願力の舟に乗じて苦海を出でて宝所に近づく事、寧ろ之の義無からんや。爰を以て、「以て強縁と作すによりて、五乗をして斉しく入ら使むることを致す」文。

**第四問答**

問ひて曰く。実（の）報土に凡夫の生ぜん事、願力を離れて生ずべからずと云ふ事、道理必然なり。若し爾らば、初め無三悪趣の願より、終り得三法忍の願に至るまで、四十八願、皆、各別の願なり。其の中、何れを以て生因と為すべきか。将、何れの願に依りて生ず

①西之有るべからす＝「有る可からず不。之れを」
②石蓮坐＝「座」
③石らば＝なし
　安蓮「て」
④石除かず＝なし
⑤安べけんや＝「べからざらんや」

註　観経疏玄義分二乗門（正由託仏願）「以作強縁致使五乗斉入」（文）
⑥安以て＝「爰」
　蓮「為」

⑦石ずと云ふ＝「ざる」
⑧石各別の願なり＝「名二別之願一」
⑨石安蓮何れを以て＝なし

べきか。

答へて曰く。今、実報土と立つる事は和尚の解釈なり。[1] 然れば[2]亦、和尚の解釈によりて、[3] 其の生因を定めて之を出だすべし。玄義分に曰く、「無量寿経に云く、[4] 法蔵比丘、世饒王仏の所に在して、菩薩[5]の道を行じ給ふ時、四十八願を発して、一一に願じて言く、若し我、仏を得たらんに、十方の衆生我が名号を称して、我が国に生ぜんと願じて、下、十念に至るまで、若し生ぜずんば正覚を取らじと」文。今、此の釈の意は、四十八願多しと雖も、只、一願を以て生因と為すかと聞[6]えたり。此則ち、念仏往生の願なり。故に、第十八願を生因と為すべきか。

**第五問答**

問ひて曰く。経文には、全く、「称我名号」の言、一一の願に之無し。和尚、何の意を以て此くの如く釈するか。

答へて曰く。第十八願を以て正しく生因[7]と為す。余の願は衆生の

①石西安如と＝「を」
②石西安れば＝「るに」
如なし
③石によりて＝なし
西安如「に」
註 観経疏玄義分二乗門
④石安如云く＝なし
⑤石薩＝「提」

⑥安聞え＝「答へ」

⑦安生＝「正」

欣慕の為なり。所謂、彼の国に於ては三悪趣無し。今、此の娑婆世界には三悪趣有り。故に、之を厭ふ時、無三悪趣の国を示す。欣求の心切にして以て生因を尋ぬれば、即ち称名なり。故に、一一の願に此の意有るか。委しくは下に料簡すべし。

**第六問答**

問ひて曰く。第十八願を以て生因と為すべしと云ふ事、解釈に分明なり。然るに、念仏往生の願を釈するに、人師の解釈甚だ多し。或は観念の念を以て念仏と云ひ、或は称名を以て念仏と云ふ。今、和尚の解釈の意、如何ぞや。

答へて曰く。観経の真身観の「光明は遍く十方世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨て給はず」の文を釈して曰く、「問ひて曰く、備に衆行を修し、但能く廻向せば、皆往生を得。何を以て仏光普く照して、唯念仏の者を摂するは何の意有りや。答へて曰く。此に三義有り。一には親縁を明す。衆生、行を起して、口常に仏を称すれ

①石廻三悪趣無し＝「無三悪趣」文」
②石欣求の心＝「欣求之心」
　安「欣慕之心」
③石廻にして＝「なれば」
④石廻ぬれば＝「るに」
⑤石称名＝「名号」
⑥石料＝「断」側註に「料か」
　廻「断」
⑦石と云ふ＝なし
⑧石安廻観念の念を以て＝「観経を念ずるを以て」
⑨安廻仏光＝「仏之光」

ば、仏[1]即ち之を聞き給ふ。身常に仏を礼敬すれば、仏[2]即ち之を見給ふ。心常に仏を念ずれば、仏[3]即ち之を知り給ふ。衆生、仏を憶念すれば、仏も亦、衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨離せず、故に親縁と名づく」文。今の釈の意は、念仏衆生を釈するに、三[4]業に約して之を釈す。三業の釈の外に憶念を以て亦釈す。知んぬ、今、憶念を以て弘願の念仏と名づくと云ふ事を。

**第七問答**

問ひて曰く。今、憶念すと云ふは、観法の相[5]と云ふか。

答へて曰く。然らず。今、憶念と云ふは、阿弥陀仏の相好・光明の功徳の相を見るなり。此の仏は真実に凡夫を度する仏なりと意得て、帰命して信ずるを憶念とは云ふなり。故に経文に、「何況憶念」[註1]と云ふをば、「正念に帰依して証[6]を獲[7]ざらんや」[註2]と釈せり。故に今(は)観法[8]の義[9]には非ず。

①石仏＝なし
②石安如仏＝なし
③石安如仏＝なし
④石三業に……釈の外に＝「約三業之釈外」
⑤石と＝「を」
如なし
⑥西証＝「而も証」
石安如「豈に証」
⑦石安如獲＝「得」
⑧石法＝「之」
⑨安如義＝「儀」

註1 観経流通分
註2 観経疏散善義

**第八問答**

問ひて曰く。相[1]好・光明を憶すと云ふは、如何が之を憶するや。観法の儀式も相好を憶するなり。若し爾らば、如何が分[2]別[3]するか。

答へて曰く。観法と云ふには二種有り。一には、聖[4]道門の観法、此は則ち、未だ今教に帰せざる前に、先づ自力にて相[5]好・光明をも[6]観じ顕はすと云ふなり。二には、今の浄土の観法、此は他力に帰して、其の上に相好等を観じ顕はすなり。此即ち、阿弥陀仏の、光明を以て十方の念仏の衆生を照して摂取して捨てざる、此の相を観じ顕はして、正しく往生の得否を定む[7]る機根の為に、之を教ふ。此即ち、今教の観法の相なり。

**第九問答**

問ひて曰く。今の意を以て、彼の聖道の観法の相を見るに、真実に彼の意にて成ずと云ふべきか。

答へて曰く。今の意にて彼の観を見れば、実に(は)今の意にて成

①石相好＝「相好の」
②石宮蓮分別＝「分明」
③石する＝「なる」
④石聖道門＝「聖道教者」
宮「聖道門者」
蓮「聖道教者」
⑤石相好＝「相好の」
⑥石宮蓮観じ＝「之を観じ」
⑦石蓮むる＝なし

ずと云ふべし。然るに、衆生の根性万差なれば、且く隔別の意にて教ふるなり。故に、(その)教より今の意を得出だして、即ち成ずべきなり。此を観法とは云ふなり。然るに、憶念と云ふは然らざるか。註今師の意は、観と念とを別の物と釈すと見えたり。故に、既に憶念と云ふに、知んぬ。彼の観法に非ずと云ふ事を。[1]故に今、憶念と云ふは、但、行者の帰依の一心なり。帰依の一心、弘願に帰す。是を憶念とは云ふなり。

### 第十問答

問ひて曰く。実に然なり。今、憶念と云ふは其の相、[2]如何。

答へて曰く。阿弥陀仏の正覚の相を意得るなり。所謂、因位に修行し給ふ時、浄仏国土[3]の行を案じて、五劫の間思惟し給ふに、全く我を念ぜん衆生をば摂取せんと云ふ願を発して、此[4]の願力終に果すに依りて成仏するなり。故に、此の仏の相を見奉れば、念ずる[5]衆生を摂取するの外に、全く別体[6]之無し、故に若し念仏する衆生の生ず

註 善導和尚をさす

①石西安如に＝「には」

②石安如相＝「相好」

③如仏＝「土」

④石此の願力……依りて＝「依此願力終果」
如「依此願力終果」

⑤如念ずる……の外に＝「摂取念スル衆生外」

⑥石別体＝「仏体は」

る事(無くば)、何を因として成[1]就せむ。此の道理の、真実に成ぜしに依りて正[2]覚を成ず、正覚を成ずる上には、念ずる衆生の生ぜずと云ふ事、惣じて以て之[3]有るべからず。故に、弥陀は我等が念力を以て成仏し、我等は弥陀の正覚を以て生死を出づべしと云ふ事、不審無き者なり。故に解釈に曰く、「[註1]彼の仏、今、現に世に在して成仏[4]し給へり。当に知るべし。本誓の重願虚しからず。衆生称念すれば必ず往生を得」と。[註2]故に二[5]輪、口密の教、万行万善の因、皆、念仏の願に依りて成就す。故に正しく、修因向果の仏・理智冥合の尊と云ふ事、分明なる者か。此即ち、帰依の一心の様なり。是を憶念とは云ふなり。

## 第十一問答

問ひて曰く。若し意得の如くならば、何ぞ経文も釈家も、皆、名号を称[6]ふるを本願と為すと云ふや。

答へて曰く。今の仏は、願を発して衆生を摂取す。其の体を見[7]れ

①石 蓮 成就＝「成仏」
②石 正覚を成ず＝なし
③石 之有る……故に＝「有るべからず。之の故に」
④蓮 仏＝なし
⑤石 二輪＝「三輪」
⑥蓮 ふるを＝「して」
⑦石 安 蓮 見れば＝「見れば即ち」

註1 往生礼讃後序の文
註2 「故に……分明なる者か。」は衍文か
酉 「故二輪口密之教万行万善之因皆依念仏願成就故正修因向果仏理智冥合之尊云事分明者欤」(以上三十九字衍文か)
安 頭註に(この三十九字上杉本・西山本共に衍文かと註せり)

ば、[1]阿弥陀とは云はるるなり。名と体と一なる仏なる故に、名号を称して、即ち憶念とは云はるるなり。然りと云ひて、真実に生ずべき道理を心に得[2]ずして名号を称すと云ふ事は、但、遠生の因とは成れども、順次の往生は叶ひ難[3]きなり。故に、憶念すれば体が名に顕はる、故に口に南無阿弥陀仏と云はるるなり。此の義の故に、称名を以て本願と釈するなり。所謂、親縁の中には、口に称し、身に礼し、心に念ずと云ひて、此の三業の行は自然に行ずるなり。故に三業の行を挙げ畢りて、惣じて結する時には、「衆生[註]、仏を憶念すれば、仏も亦、衆生を憶念し給ふ、彼此の三業相捨離せず」と云ふなり。三業に出づる時、名体不二の仏なるが故に、口に名を称すれば、正しく弥陀の全体顕はるるなり。憶念の姿顕はるれば、口称の阿弥陀仏と云はるるなり。故に、本願を「称我名号」と釈するなり。

①㊟阿弥陀＝「阿弥陀仏」

②㊟安㊟得ずして＝「得ずして生ずなれども」

③㊟難きなり＝「難し」

註　観経疏定善義真身観の釈

## 第十二問答

問ひて曰く。名は即ち体なりと云ふ事、思ひ難し。如何。

答へて曰く。礼讃[註1]に、「光明無量なる故に阿弥陀と名づけ、寿命無量なる故に阿弥陀と名づく」取意。堅に寿命無量なれば、三世に亘りて衆生を摂す。横に光明無量なれば、十方に遍して衆生を度す。所詮、摂衆生の願の極まる所を阿弥陀と名づく。故に阿弥陀と云へば、其の実①、顕はるるなり。本願を憶念すれば、口に阿弥陀と称するなり。此の故に、釈尊、光台現国の時、韋提重ねて、「我[註2]、今、極楽世界の阿弥陀仏の所に生ぜんと楽ふ」文。其の名を知らず②して、阿弥陀と云ふ事は、此の意なり。故に、名体相即の仏と云ふなり。「南無とは発願廻向なり、阿弥陀③とは行なり」文。此の弥陀の体、既に成ずれば、必ず念ずべき衆生、之有るなり。故に、帰依の一心を三心と云ひ④、南無と云ふなり。法蔵菩薩、垢障の凡夫の為に、正しく⑤報身の体を隔て無しと云ふ願の成ずるを、阿弥陀と

註1 往生礼讃

註2 観経序分欣浄縁

①㊀実＝「体」

②㊁㊂知らずして＝「知らずして其の体を見て」

③㊃阿弥陀＝「阿弥陀仏」

④㊁㊂云ひ＝「云也」
㊀「云ヮ」

⑤㊁正しく……体を＝「正報の身体を」

名づく。故に、衆生の往生すべき行を成[1]じ得て立つる仏を、阿弥陀[2]と云ふ。阿弥陀と云ふは行なりと云ふなり。此の義を以ての故に、帰依の一心を以て摂取するを、本意と為すなり。此の一[3]心を三心とは分別す。

抄[註4]（三心の事）

所謂、至誠心とは、先づ衆生の三業の行と[5]真実の行との[6]様なり。此即ち、凡夫と云ふは乱想[7]なるが故に、自力の業にては報土に生ぜず、彼の国に生ずる事は、彼の願力に依りて生ずると云ふ心を起す、故に此の心は、自力・他力を分別するなり。二に、深心と云ふは、本願の真実に、凡夫の度せらるる相を信ずるなり。是に二の信あり。一には、我が身は無始已来生死を離れずと云ふ事は、今の本願に遇[8]はざるに依りてなり。此程にあさましき[9]衆生は、何もの[10]も、此の本願の縁の外には叶[11]はじと信ずるなり。二には、万善万行の因はし[12]なじなれども、此の弥陀の本願によらず[13]んば、惣じて生ずべ

①石如成じ得て＝「成じて待て」
②宏阿弥陀と云ふ＝なし、
③石西宏如一心＝「一念」
　西「一念」の下に
　（念は心か）と註す
　宏「一念」の下に
　（念は心かと註す）と註す

註　石如は改行せず
　西宏は改行す。
④石抄（三心の事）＝「抄三心事」
　西「抄（三心の事）」
　宏「抄三心の事」
　如「抄三心ノ事」
⑤石如と＝なし
⑥石如との＝「となる」
⑦石宏如想＝「相」
⑧石宏如遇はざるに＝「顕はさるるに」
　西（原本顕に作る）と註す。
⑨石あさましき＝「浅間敷」
　宏「浅間しき」
⑩石宏如何ものも＝「何にも」
⑪如叶はじと信ずるなり＝「信ずべからじとなり。」
⑫石しなじな＝「品品」
⑬石西宏如よ＝「寄」

からず。若し本願に依らば[1]、我等罪悪の身[2]なれども、生死を離るる事一念も疑ひ無し。今は、生死を離[3]るると離れざるとは、我が疑ふと疑はざるとに有りと信ずるなり。上は、機の罪悪なるに付きて信を立て、下は、法の難思に付きて信を立つ。此くの如く、二の信立ちて、真実[4]、生ずべき事を疑はず。惣じて以て、異学異見等[5]の難破[6]せん事を用ゐざるなり。此を深心[7]とは云ふなり。三に、廻向発願心と云ふは、一切の万行万善・三世の善根・自他の善は、皆、阿弥陀仏の功徳なり。此を隔別[8]したる心にて修行しける間、成じ難し。今、弘願に帰すれば、即ち是れ其の体一なり。此の願[註1]の中より開きて、今の願[註2]を詮はす所を、機に随ひて説き出だすなり。此の故に、今は微少の善根も成ずと云ふなり。此の心を廻向と云ふなり。所詮は、帰依の一心を三に分別するなり。此の心を発[9]して、憶念相続するに、仏の三業と相応す。故に、「彼此の三業相捨離せず[註3]」と云ふなり。仏の三業無間なれば、衆生の三業も無間なり。此を無間修と

①石安如らば＝なし
西「りて」
②安身なれども＝「身なりとも」
如「身なれども」と「身なりとも」の二つを記す。
③石西安如離るると離れざるとは＝「離れざる事は」
④石西安如真実＝「真実に」
⑤安如学＝「覚」
⑥石等＝なし
⑦石如深心＝「深信心」
⑧石西安如隔＝「各」
註1 弘願をさす
註2 廻向発願心をさす
⑨石西如発して＝「以て置て」
安「置て」
註3 観経疏定善義真身観

云ふなり。一切万行、之に依りて成ずと云ふ。此を無余修と云ふなり。弥陀に帰する上には、一切の諸仏一仏なり。[1]故に、余仏を[2]礼するをも、[3]即ち万善を成じ[4]往生の因と成る。[5]此を恭敬修と云ふなり。此の恭敬修の中に、余礼を雑へずと云ふは、隔別[6]と心得る[7]時を云ふなり。故に、此の心を発さば、恒に[8]、十方三世一切三宝と[9]礼するか。此の心相続して、命終に至るまで退かざる。此を長時修と云ふなり。

### 第十三問答

問ひて曰く。若し本願に依りて[10]即ち(出離を)成ずと云ひて、機の善悪を論ぜずと云はば、凡夫は悪を以て心と為す故に、造悪の義、定んで止むべからざるか。

答へて曰く。此の問、甚だ拙し。本より、観門・弘願と立つる上には、此の難来るべからず。今、二尊の教に乗じて広く浄土の門を開く。釈尊の教の方より云はば、一分の悪も、皆、三途の業、微(少

①石西安如諸仏＝「諸法」
②石安如を＝「をも」
③石をも＝「も」
④石を＝「と」
如なし
⑤石西安如と＝「とも」
⑥石西安如隔＝「各」
⑦石安如と心＝「の心と」
⑧石如恒に＝「互に」
安「亘」
⑨石西と＝「を」
⑩石依りて＝なし

の)善も悉く浄土の因と云ふ。何ぞ、此の説を聞[1]きて(悪を)畏れざらんや。若し釈尊の説教を用ゐざらん人は、豈に弥陀の弘願に帰せんや。但し今、見・思二惑をも断ぜず、塵[2]沙無明をも滅せざる、凡夫の心を以て報身の相好を拝し、報仏の国土に生ぜむ事(は本願による)、本願の甚深なる事、何事か之に如かんや。故に本より、観門・弘願相離[3]れざる法門と云ふは是[4]なり。

**第十四問答**

問ひて曰く。「註諸悪莫作諸[5]善奉行」は七仏の通誡[6]なり。実に微少の悪も、皆、三途の業と云ふ事、実に然るべし。此の事[7]、実に能く能く意得べき事なり。此の上には心に案[8]ずべしと云へども、観門の方を以て之を云はば、本願に疑ひ有り。弘願の方を以て之を云はば、廃悪の心急が(れ)ずして、道理に隔[9][10]たること、必然なり。猶、解釈を出だして意得べきなり。其の文証、如何。

答へて曰く。此の事、真実の道理を得たる上には、行者の心に察

①蓮聞=「開」
②宮蓮塵=「広」
蓮側註に「恒か」
③蓮離=「対」
④宮是=なし
註 四十巻涅槃経巻第十五梵行品八之一
⑤石諸=「修」
⑥石宮蓮誡=「戒」
⑦酉事、実に=「事実」
⑧酉宮案ず=「察す」
⑨石宮蓮に=なし
⑩宮隔=「強」
蓮「隔」の横に「歟」と註す。

すべし。但し、観門・弘願かたつり[①]にならば、必定[②]、あやまちあるべし。能く能く意得べし。実に此の事は、胸臆の説を以て、此程の大事を定むる事は、実に用意有るべきか。是を以て、下品下生の疏の文に曰く、「問[註1③]ひて曰く、四十八願の中の如きは、唯、五逆(と)誹謗正法とを除きて往生を得しめず。乃至。若し造らば、還(また)、摂して生ずることを得しめん」文。此の解釈、分明[④]なり。かたつり[⑤]なること有るべからず。能く能く意得べきか。故に、凡夫の正しき出離生死の道は、実に此の義に非ずんば、何事ぞや。此即ち、(弥陀)報身の智の冥に加する故なり。之に依りて、観念法門の中には、「三世の諸仏は念弥陀仏[註2⑥]三昧に依りて等正覚[⑦]を成ず」取意。此の釈の意は、凡夫の出離[⑧]も、諸仏の成仏(も)、今(の)弘願に帰して成ずと云ふか。

**第十五問答**

問ひて曰く。若し、三世諸仏の成仏は弥陀に依ると云はば、何故

①石かたつり＝「偏頗」
　西「かたつり(偏頗の意)」
②石安如必定＝「必定して」

註1 観経疏散善義
③西安問ひて曰く＝なし
④安如分明＝「分別」
⑤石かたつり＝「偏頗」

註2 観念法門現生得功徳問答の答に引用の般舟三昧経の説なり。
⑥西仏＝なし
⑦安如等＝なし
⑧石も＝「は」
　西安如なし

ぞ、経に「十劫成仏」と云ふや。故に、十劫以前の衆生は、必ず①も弥陀の力に依らずと聞えたり。況んや、弥陀は即ち、五②十三仏に依りて成仏すると見えたり、如何。

答へて曰く。③此くの如き説相は、併しながら観門の説なり。無始性徳の理の中には、正しく凡夫を度する事、之有りて、阿弥陀と名づく。然るに④理性の故に、此の功徳は凡夫・聖人の心中に皆遍満す。此即ち、仏性と云ふは是なり。然るに⑤此れ理なる時には、凡夫は知らざるが故に覚らず。此を智を以て覚りて、凡夫の為に事相に顕はす時には阿弥陀と云ひて、指⑥方立相して⑦西方に仏有るぞと云ふなり。故に、生死を離るる事は事に依らずんば、何ぞ然らんや。然るを事に顕はすとは、願に依りて衆生を摂取するなり。故に、願を発す仏と⑧号づくる故に、必ず始有りと云ふなり。此くの如く、始成正覚の相を機の為に説く故に、十劫[註1]⑨とも十八[註2]劫とも云ふなり。此の所説は、皆、観門の説相なり。弘願の方よりして即ち之を云はば、

①右西ずしも＝「ず」
　宮蓮なし
②蓮五十三仏……成仏すと＝「依ニ五十三仏成仏ニ」
③右此くの如き説相は＝「如ニ此説相ニ」
　蓮「如此説相」
④右西宮蓮に＝「を」
⑤右此れ理なる＝「此の理有る」
　宮「是の理有る」
　蓮「此理有る」
　西「此の理ある」
　　の下に（或るの意か）と註す。
⑥右方＝「法」
⑦右西宮蓮して＝「の」
⑧蓮号づくる＝「字」
註1　無量寿経巻上
⑨西宮蓮とも＝「とも云ひ」
註2　平等覚経第一

一切成道の劫数は幾ばくと云ふ事、定むべからざるか。願[1]を発して事に顕はして、凡夫[2]、分[3]を得ると云ふは即ち弘願の体なり。故に、三世諸仏は弥陀に依りて覚を成ずと云ふは、此の道理なり。所謂、一切の応身と云ふは、此の弥陀の願を、凡夫の為に穢土に出でて説き顕はすなり。今の釈尊即ち其の本なり。十方の応身も皆此くの如し。一切の菩薩・一切の縁覚・一切の声聞と云ふは、弥陀の自覚を二乗と名づけ、覚他の功徳を菩薩と号づく。皆、弥陀の功徳を顕はして、穢土に出でて入聖得果の相を現はす。此即ち、正しく凡夫を各別に教化して、根性の不同に随ひて、各、種々に教化して、終に弥陀国に帰せしめらるるなり。此の種々の相を各別に説くを、皆、聖道門と名づくるなり。此即ち、観門の説相なり。故に、十方三世の仏[4]、万行万善の修[6][7]因、併しながら、弥陀一仏の功徳を種々に顕[8]はして衆生を教化すと云ふなり。此は、浄土宗の意を顕[9]はす観門の智なり。亦は三心と名づく。観経の説相も、併しながら、此なり。天

①石願を発して＝「発願が」
　西安如「発願を」
②石西安凡夫＝「凡夫の」
③石西安如分を得る＝「得分」

④石西仏＝「仏の」
　安如「仏も」
⑤西万行万善＝「万善万行」
⑥西修＝「酬」
⑦石西因＝「因は」
　安「因も」
⑧石西安顕はして＝「して」
　如なし
⑨石安如顕はす＝「発す」

台所説の随縁・不変の両真如も、此の道理の上にて意得[1]べきなり。根性各別する時を随縁真如と名づけ、万法(に)通じて不動なるを不変と号す。実相中道の理は、万法に通[2]ぜずと云ふこと無し。然れば、[3]我等の心中には、皆、報身の智を具足せり。忽ち此の理に冥合するが故に、理の体虚空に遍[5]すれば、智も亦、虚空に遍[6]す。故に弥陀の体は、我等が心中に遍満し給[7]ふこと歴然なれども、迷中に有[8]るを、皆、理性と云ふなり。然るに、光明と云ふは、報身の智恵の体なり。此を、「光明遍く十方世界を照す」と云[9]ふは、智恵の虚空に遍[10]する相なり。「念仏の衆生を摂取して捨て給はず」と云ふは、此の智恵の光明[11]によりて、正しく益[12]有る時を云ふなり。故に、理を談ずる時[13]は此くの如く云へども、事に顕[14]はす時は、亦、光明を現はして以て照すなり。報身・報土と云ひながら、指方立相を談ずるなり。「或は小身を現じて丈六八尺なり」[註]と云ふは、真実に甚深の法門なり。此くの如く意得るを、一乗と云ひ、頓教とも云ふなり。何の失

①石𦍒べき＝なし

②石通ぜず……無し＝「無レ不レ通」

③石西安れば＝「るに」
　𦍒なし

④石西安𦍒我等＝「此等」
　石側註に「天台等」

⑤西𦍒遍＝「通」

⑥西遍＝「通」

⑦西安ふこと＝「ひて」

⑧石るを＝なし
　安「て」

⑨西安云ふ＝なし

⑩西遍＝「通」
　石「偏」

⑪石によりて＝なし
　西安𦍒「に」

⑫石西安𦍒益有る＝「有益の」

⑬安𦍒時＝「日」

⑭西安𦍒はす＝「はるる」

註　観経雑想観

か有らんや。一乗と云ふは、凡夫の初心より仏果の極位に至る中間には二乗無し。故に一乗と名づくるなり。今、念仏宗は、此の弘願に乗じて、凡夫より仏果に至る、蓋し此の謂れか。

### 第十六問答

問ひて曰く。天台には、四土・三身を立てて、界内・界外を判ず。界内とは、同居の穢土[1]には劣応身なり、同居の浄土には勝応身なり、若しは第三の身なり。界外と云ふは方便土なり。或は勝応身、或は報身なり。実報土には報身、寂光土には法身なり。故に、三身の土は各別にして、其の義、分明なり。然るに、今家には、三身を立つると雖も、四土を立てず。今、天台所立の如く意得べきか。亦[3]、其の義相に異なり有るか[4]。如何。

答へて曰く。今家の意は、三身を釈する事、分明なり。但し、土に於ては、穢土・浄土と云ふなり。全く四土に分別せず[5]。若し、天台の四土を今の意にて対判せば、報身と云ふは自受用身なり、土と

①石の＝なし
安如「なり」
②石には＝「の」

③安如亦＝「未」
④石如有る＝なし
酉「ある」
⑤石如に＝「を」
安なし

云ふは実報土・寂光土等の分斉に当るなり。然るに、凡夫の生るる事は、他力に依りて生ずと云ふ事を釈し立つるを、今家の詮とはするなり。若し、機に約して説かば、種々の差別有りと云ふなり。其を、天台宗には機に随ひて法を判ずる故に、下地は上地を見ず、或は二乗は報土に生ぜずと云ふなり。今家は、願力所成の報土に生じて、其の上[1]に観門の説相[2]として、次位[3]・浅深を歴ると云ふぞと意得るなり。然りと云ひて、下地は上地に及ばずとは云はざるなり。然るに、周円[4]無際にして、方域分限有ることなき[5]なり。これを願力を以て、凡夫の為に指方立相するなり。諸師は、機の方を以て次第に自力にて進むと意得、指方立相するをば、皆、同居の浄土と云ひて報土とは云はず。今は、指方立相するは願力の不思議にてするなり。何ぞ機に随ひて判ぜんやと意得、報土に凡夫入ると釈するなり。故に、諸師は機に随ひて判じて西方を同居[7]の浄土と云ふ。凡夫・二乗生ずと云へども、実に願力所成の報土[8]なる故に、如何[9]につくりまは[10]

①石上＝「故」
②石として＝「は」
　酉安蛔なし
③石次位……歴ると＝「以二位浅深一歴□□」「以」の側註「次か」
　酉「次位浅深歴□□□（□は欠字）」
　安「次位浅深歴□□□」
　蛔「次位浅深歴□□」
④石円＝「徧」
⑤石安蛔なき＝なし
⑥石安これを……以て＝「機以願力」
　酉「機を以て願力を」
　蛔「機以願力」
⑦石同居の浄土＝「同居土」
⑧安蛔な＝「成」
⑨石安蛔如何に＝「何」
⑩石安蛔ま＝「あ」

すとも、凡夫の自力の行にては生ぜざるなり。他力に帰して、身器[註1]清浄の人[①]と成りて、其の上にて云ふが故に。惣じて以て凡夫の（自力にて）生死を出づる事は難きなり。

## 第十七問答

問ひて曰く。彼の国に生じて後は、実に自行も其の思ひ痛み無くば、何ぞ次第・次位・浅深を分別せんや。但し、[②]極楽に生じて後は、次第に登るとは云ふ[③]べきにあらざるか。如何。

答へて曰く。今家[④]の意は、極楽にて次第[⑤]を経ると云ふは、娑婆一種の凡夫の為なり。所以は衆生の根性万差なり。故に、八万四千の教は、皆、仏果をつくり上げて[⑦⑧]、今の迷の衆生は其の間より各別に入るなり。若し仏果を云はずんば、今の凡夫、何ぞ其れ修行せんや。例せば、彼[註2]の別教には、「有教無人」と云ふが如し。所以に、初地以上に成りぬれば円人[⑩]と成る。然れども、別教の機は、地上にも人有りと見ればこそ、十廻向とても修し上がれ[⑫⑬]、其の地上[⑭]の人

註1 此の下の文、脱文あるか。
①石人と＝なし
②石安如但し＝「只」
③石安如云ふ……あらざるか＝「不レ可レ云欤」
石「不」の側註に（恐らくは「非」なり）
④石安如家＝「宗」
⑤石を＝なし
西安如「に」
⑥石所以は……万差なり＝「所ニ以ン衆生根性万差ナル一也」
西如「所以ノ衆生根性万差也」
安「故衆生根性万差也」
⑦如を＝「とて」
⑧石つくり＝「作り」
⑨安如其れ修行＝「其の修行を」
註2 天台をさす
⑩石西如円＝「同」
安「因」
⑪西「修し……云ふなり。」の下に（二十六字意義不明）と註す。
⑫石西安修し＝「修」
如なし
⑬石西安如上＝「あ」
⑭如地＝なし

を尋ぬれば、経る[1]円人の、別人の経る[2][3]事を云ふなり。今も少し彼に似たり。凡夫の、聖道教を学する心地は、経る[4]仏果に登るべしと意得て学するなり。実に生死を離るる時は、今の教の意になるなり。[5]然るを、身器清浄の人、次第に聖道より経る[6][7][8]註なりをして、仏果とて修行するなり。此を凡夫の見て、実に此は聖道より修行して成仏すと見る故に、彼の教を修行するなり。此即ち、今の弘願の体にて直ちに帰せん事は、根性万差なる故に叶はず。此を方便して、八万四千の教と分別して、定散二善の機によせて説き教ふるなり。故に、意得(て)見れば、皆、今(の)教の為なりと見ゆ。各別して見れば、其の教より仏果にとづくと見る。何れも差はざる事なり。其を、彼の教を以て此を難じ、今の教を以て彼を難ずる事、互に憍慢を生ずれども、更に以て無益なり。実に、生死を出づべき機の前には、更に以て違ひ無きか。已上、念仏宗の一乗・頓教の義、是くの如し。

①石西安蓮経る円人＝「フル同人」
②西の＝なし
③石西安蓮経る＝「フル」
④石経る＝「フルテ」
　西「フル」(意義不明)
　安蓮「フル」
⑤石になるなり＝「なるべし」
⑥西蓮より＝なし
⑦西「経る……仏果として」
　の下に(十一字意義不明)と註す。
⑧石西安蓮経るなり＝「フル也」
註「なり」は「形・態」の意なり。
⑨石をして＝「押して」
⑩西安蓮仏＝「仏仏」
⑪西修行するなり＝なし
⑫蓮の＝なし
⑬石よ＝「寄」
⑭西安教より＝なし
⑮安蓮とづく＝「とつぐ」
⑯安も＝「とも」
⑰西難＝「生」
⑱安互＝「直」
⑲西安蓮を＝「は」
⑳西以て＝なし
㉑石安蓮の義＝「対せば」
　西「に対せば」

## 第十八問答

問ふ。念仏宗の大意は、実に道理[1]必然なり。此の上に、猶、一両の不審を出だして、弥、一宗の奥深を極めん。一には雑行差別する事、既に観解を発して弘願に帰する人の心に、何ぞ分別の義有らんや。既に正と立つる上[2]には、何等の善か雑ならむ。自力の時には、一切の善は、皆、雑行なりと云ふなり。他力に帰する上には、一切の善は正行と云ふべきなり。故に、九品を明して正行と為す。又[3]、散善の中には、九品の善に非ざる善根[4]とては之無きなり。何ぞ、善根を除きて雑行なりと云ふべきや。次に又、称名念仏に於ては、既に本願と釈する事、処々に分明なり。然るを[5]、「註持戒念仏誦経専」とも云ひ、或は親縁の中には三業の行に列[6]ね、或は五種正行の中には行のつら[7]に第四に列ねたり。此等の釈は、皆、諸善と念仏と同(じ)行なりと釈すと見えたり。問[8]ふ。若し爾らば、余行に勝るる本願なりと云ふ事、如何に意得べきや。

①石道理＝「道理に」
②石上には＝なし
③西又＝「亦」
如「文」
④西肉如とては＝「は」
⑤石然るを＝「然に」
如「然を或は」
註 般舟讃
⑥石西肉如に＝「を」
⑦肉つらに＝「つらには」
⑧石如問ふ＝なし

答へて曰く。実に一一不審なり。委悉の料簡[1]は、別抄の如し。今、且(しばら)く少分を述ぶれば、観門の解を発し弘願に帰する人の心には、実に、一切の善根は、皆、正行と云ふべきなり。自力修行の人の心には、一切の善根は、皆、雑行と云ふ事は、一宗の大事なり。其の中には、猶、種々に分別するなり。所謂、弘願の正体と云ふは憶念なり。然るに、此の憶念の体の色に出づる時、行者[2]の三業に出でて有るなり。此の三業に出づる時を、正行とは云ふなり。此の正行のつらには、口称念仏をも行と云ひ、或は持戒念仏とも云ひ、或は五種正行の中に第四にも置く。或は親縁にも、三業の行のつらに[3]有るなり。然るに、名体一と成る道理を立つる時、第四の称名は正定の業と云ひて、余行は助とするなり。故に、四種の正行を分別するに、四[4]の差別有り。第一には、憶念を正と為す。此の憶念を立つる上に、余行は正と云はるるなり。第二には、口称を正と為す。名体一なる故に、憶念の体顕はるる故に。第三には、五種正行を正と為

①𝔰料簡＝「断間」
側註に（恐らくは「料簡」）

②𝔰者＝「志」

③𝔰つらに＝「つらに不審」
𝔰「つらに四種正行と」、「四種正行」の側註に「不審」

④𝔰四＝「日」

す。此純[1]ら極楽の行なる故に、余の善根は十方の通因なるが故に、彼に対して且く五種を正と為す。第四には、一切の万行を正と為す。往生経に依りて行を行ずる者、今[2]の観経の意に依らば十方通因の万行万善は、皆、弘願の一法より開出する弥陀一分の功徳なり。故に、九品正行を明かすと云ふなり。曰く。重々[4]の正行の料簡[5]、此くの如し。是即ち、上の二の不審を明かすなり。

**第十九問答**

問ふ[6]。既に一切の善根は、皆、正行と云ふ。此即ち、観門の解を発して弘願に帰する故なり。若し爾らば、定散二善は、此の上に必[7]ず之を修すべきか。亦但[8]、口称に限りて、念仏に帰する人は、余行・余善を廃すべきか。如何が存ぜんや。

答ふ。此の二の問[9]は一辺なり。必ず之を修すると云はば、五逆の罪人、最期[10]に臨んで、十念を称して余善を修せず。往生せずと云ふべきか。之を以て案ずるに、一形百年の間、但、名号を称して、余[11]

①安純ら＝「経」
②石今の＝「今此」
③石を＝なし
安如「と」
④石重々の＝「種々の」
⑤如料簡＝「断問」
⑥石問ふ＝なし、
⑦石安如必ず＝「心に」
西「意に」
⑧西安如亦＝「然」
⑨石安問は一辺＝「問答は辺」
西「問答は一辺」
如「問は辺」
⑩石安如期＝「後」
⑪西余善＝「余行」

善を修せざる人有らば、何ぞ往生せざらんや。亦、衆生の根性不同にして、得脱の機一準[1]ならず。読誦等の行に依りて進む心の人有りと云はば、弘願に帰する上には、万善は、皆、弥陀の一願より開出すと云ふ。何ぞ隔てて之を修せざらんや。何に況んや。無始生死より以来、無量の善根を修せり。其の善根漸く積んで、今生に弥陀の名号に逢ふこと、[註1]おぼろげの宿因に非ずば、何ぞ視聴せんや。[2]今まで浄土の教に遇はずして、一切の万行・万善は、皆、弥陀の一法より開出しけるを知らずして、生死に輪廻す。然れども、慈悲際限無くして、種々に教化す。此の種々の教化に依りて、今生に既に弥陀の名号を聞く。諸仏の恩徳の深き事を、豈に報じ尽さんや。此くの如く、諸仏・菩薩の恩徳を思へば、[5]万行万善を修する人を随喜せん事、極まり無し。此即ち、生死を出づべき器なり。何ぞ、之を随喜せざらんや。故に、廻向発願心の（釈の）中には、[註2]一無始より以来所修の善根、自他・凡聖所修の善根乃至随喜の功徳は、皆、浄土の

①石宮圓準＝「純」

②西宮生に＝なし

③石圓おぼろげ＝「ヲボロケ」
宮「ヲボロゲ」

註1「おぼろげ」は
「おぼろげならず」の略語。
「なみなみならぬ宿因」の意

④石西宮圓今まで……遇はずして
＝「今、浄土の教に遇ひて」

⑤石万行万善＝「万善万行」

註2 観経疏散善義の取意

因と成る」と云ふは、此の意なり。此くの如く意得る上には、進む[1]心に随ひて定散二善を修せん事、尤も然るべし。定善は、新に浄土の境界を見る事、実に殊勝なり。散善の中に(は)、或は大乗を読誦して、諸仏の方便を以て種々に教化し、衆生に酬いん事も意得、弥陀弘願の難思なる事をも信じ、或は五戒の修因に酬いて、今、人界に生を得て、弥陀の名号[2]を聞き、我は既に生死を離るべきも、願はくば未だ弥陀の名号に遇はざる者には五戒を教へて、来生には人界の生を得て、弥陀の名号を聞[3]くべしと教ふべきか。今、一[4]戒の相を挙げて諸戒を知るべし。我、今生の父母の恩徳甚深なり、生長して弥陀の名号を聞く故に。或は師長の恩徳は報じ難し、既に生死を出づべき故に。此[5]くの如く意得れば、弥陀の名号を聞き、決定して生死を出づべき意趣の人は、弥[6]、定散二善を修すべきか。自力修行の時は、諸善未だ成就せず。他力の弘願に帰すれば、諸善併しながら成ず。寧ろ之を廃すべけんや。観門の上の行と云ふは是なり。此くの

①石西宮進む心に随ひて＝「随進心」
如「随進心」

②西号＝「称」

③石聞くべ……べきか＝「聞くべきか」

④宮一戒の相＝「一行戒相」
如「一形戒相」

⑤如此くの如く＝「此」

⑥宮弥＝「称」

如く意得れば、余善も併しながら助業と成るなり。故に、五種正行の中には、口称を以て正定業[1]として余の四の行を助業と釈すと見えたり。故に達して意得れば、機の堪・不堪に任すべきなり。

### 第二十問答

問ひて曰く。念仏宗の大旨は、実に然るべし。此の上に一の不審、之有り。念仏[2]の数遍に付きて論ずる事、学者の料簡[3]区々なり。或は一念を以て往生の因とすと云ひ、或は多念を以て往生の業とすと云ふ。何れの義に付きて定むべきや。

答へて曰く。此[4]の二の料簡は一辺なり。若し一念を以て往生の業と定めなば、一形の間、只、一念を称し、此の一念の信を生ずればとて、其の上には一形空しく過さん事、然るべからざる事なり。一念・一声[5]を以て生因[6]と為すと云ふ事は、解釈に見えたり。一形の機に約して之を勧[7]むる事、見えざる者なり。多念を以て往生すべし[8]と云ふ事、此も亦、一辺なり。若し、造悪の機、最後の[9]一心に改悔し

---

①医正定業＝「正助業」

②石念仏の……論ずる事＝「付念仏数遍論事」
　西医「付念仏数遍論事」
　如「付念仏数遍論事」

③医如料簡＝「断問」

④石此の……一辺なり＝「此の二を断じて問答は辺なり」
　医「此の二の断問は若辺なり」
　如「此二の断を問は若辺なり」

⑤如声＝「称」側註に「声」

⑥石生因＝「一生因」

⑦医如勧＝「進」

⑧石と云ふ＝なし

⑨石の＝「に」

て一念称せむ。此の人は往生すべきなり。何ぞ、多念に非ずと云ひて、之を嫌はんや。但し、「[註1]上、一形を尽し、下、十念・一①念・五念に至るまで、仏、来迎し給ふ、」と云ふなり。一度(ひとたび)、弥陀の名号に帰する人は、最後まで②之を修すべしと云ふなり。此の帰依の時節③の多④少に依りて、念の多少之有るべ⑤きなり。⑥故に、第四の疏に云く、「[註2]上、一形を尽し、下、一日・一時・一念等に至る、或は一念・十念より一時・(一日)・一形に至る、大意は、一(ひと)(たび)発心して⑦已後は、誓ひて此の生を畢るまで、退転有ること無し。唯、浄土を以て期と為す。」文。此の釈の意は、⑧多より少に至り、少より多に至ると云ふなり。所以に、先づ多より少に至ると云ふは、人寿に対す。今より後、速に弥陀の名号に帰して、畢命を期と為して退転無く、教化の善知識も、所化の一形を⑨存じて⑩勧むるなり。然るに、寿命不定にして、一形を存ずる人、忽ちに、此の帰依の一心を以て即ち命終す。故に多より少に至ると云ふなり。次に少より多に至ると云ふ

註1 法事讃巻下
①石一念……至るまで、仏＝「一念の念仏も」
②石如まで＝「とて」
　西「にて」
③安如節＝「即」
④石西安多少に……多少＝「多少は念の多少に依るに」
　如「多少、念の多少も」
⑤安べきなり＝「べからざるなり」
⑥如故に＝なし
註2 観経疏散善義
⑦石西安して＝「の」
　如なし
⑧石西安如多より……至る＝「少より多に至り、多より少に至る」
⑨西安を＝「に」
　如なし
⑩石西安如勧むる＝「信ずる」

は、或[1]は、人の、重病を身に受け、寿限[2]既に近し、善知識来りて、最後なりと知りて、急に之を教化す。病者も最後と思ひ、知識も最後と教ゆ。寿命不定にして、此の人の寿、忽[3]ちに延び、病[4]速に愈えて、存命四十五年なり。此の人は、最後と存じて、一心を以て、此の一念より即ち一形に至る、此を少より多に至ると云ふなり。故に、時節の久近を論ぜず、只一度帰して後は、永く退転無きなり。数遍(は)不定なるなり。

## 第二十一問答

### 註華座観三尊事

問ひて曰く。第七華座観の初めに、空中に三尊住立[5]するのは、実に十六観を説きし時、重ねて再び現ずるか。若し、実に、再び現ずと云はば、上の光台現国の時は依報[6]ばかり見せて、韋提は、正報を華座観に現ずる時、初めて見るにも有らむ。如何。

答[7]へて曰く。義(には)、実に(再び)現ずるなり。上の光台現国の

①𠮟或は、人の＝「或人」
②右𠮟限＝「根」
③𠮟忽＝「急」
④右病＝なし

註右𠮟別行とせず、
西𠮟別行とす。
⑤右立＝なし

⑥右報ばかり……正報を現ずるなり＝「正二報現也」
⑦𠮟答へて曰く。義＝「答義云」

時、依正二報を現ず。韋提、即ち、二報を之見るも、華座観の初めに、又、重ねて正報[1]を現ずるなり。

第二十二問答

難じて曰く。今の義は、観経の意を二たび明かすなりと料簡するなり。此即ち、光台に二報ともに現ずるを韋提見て開悟し、是より未来[2]の衆生の為に重ねて光台所現の二報を説き給ふなり。故に、初めて現ずる事は無けれども、依報の終り正報の初めに現ずと説くなり。故に、二明(は)一明なりと意得るなり。初めて現ずと云はば誰か知る。正報は此に(て)初めて現ずるにも有らむ。此の事、大いに以て意得られず。上の光台に二報現ずと云ふは、是此に現ぜざるを現ずと説くなり[3]。又、此に初めて実に現ずと云はば、上には正報現ぜずと云ふべきなり。如何。

答ふ。義に曰く。実に現ずと云ふ[5]も、二明の料簡[6]、一切相違せざるなり。又、実に現ずと云ふにも、真実、得分は有るなり。聞見同

①宮報＝「法」

②石西宮蓮未来の＝「来迎」
石側註に「誤字か」

③石蓮くなり＝「と云ひ」
④蓮又＝なし

⑤石西宮蓮云ふも＝「云ふをも」
⑥宮蓮料＝「断」

ずと云ふ事も意得らるるなり。其の故は、[1]韋提[2](得益)分の開悟の相を見るに、光台にて二報を既に見(たり)、二報は見たれども「汝是凡夫」と説き出でて説かれぬ程は、見[3]たるにもあらぬなり。語の体の顕はるる時、我見ると云ふなり。此即ち、見を聞に同じて[4]、真実の語の体顕はれて仏現じ、仏の現ずるは語の体顕はるるなり。故に、聞[5]見一なりと云ふ事は、序分にて韋提[6]の顕はしたるなり。其を[7]、未来の衆生の為に、正宗にて此の道理[10]を顕はすなり。十六観の語の体既に出でたる間、即ち語に随ひて三尊現じ給ふなり。詮ずる所、語の体[13]顕はるれば三尊現じ、三尊を見れば摂取不捨[14]の相を意得るなり。我等観経を以て、他力異方便の語の体を意得れば、必ず見[16]の義顕はる。是即ち、[註]五種増上[17]縁[18]の見仏三昧増上縁、又、三縁の中に近縁の道理を立つるなり。故に、二明を一明[19]に同ずる事、未来の衆生の聞説・見仏の事も、韋提と殊なる事無く、実に有りと云ふ事は顕はるるなり。

①西は＝「に」
安なし
②西「韋提」の下に(得益の二字脱落か)と註す。
③石見たるにも＝「見も同じ」
如「見とし見にも」
④安同じて＝「見て」
⑤石聞見＝「聞是は」
⑥西韋提＝「韋提」の下に(来迎の誤りか)と註す。
安頭註に「来迎の誤りか」
⑦石西安し＝「れ」
如なし
⑧西其を＝「其の」
安「其」
⑨石西安如未来＝「来迎」
⑩西安道理を顕はす＝「道理顕はる」
⑪西安体＝「体に」
⑫西安所＝「所の」
⑬西安体＝なし
西「語の」の下に(体の字脱落か)と註す
安頭註に「語の下、体の一字脱落か」
⑭西安の相を＝「と相ひ」
⑮石我等＝「即ち我等」
⑯西見＝「是」
註 観念法門
⑰石安如種＝なし
⑱安上縁の見＝「由由由由」
⑲安明に同ずる事＝「由由由由」

## 第二十三問答

問ひて曰く。若し爾らば、十六観の終りに之有りや。

義に云く。此の道理を得たる上には、前後いづくにても苦しからざるなり。但し[1]、殊に華座観の初めに有る事は、依報の後[2]に正報に移る時、事の違[3]ひ目有る時、現じ給ふなり。故に、序分にては韋提の聞[4]・見同ずる相を顕はし、光台に[5]二報を見る上に「汝是凡夫」と云ひて、見[6]を聞に同じ、正宗にて依報を説きて三尊現ず[7]る時は、聞[8]を見に同ずるなり。故に、聞・見同ずる義、真実に顕はるるなり。

### ○石黒本奥書

自信教人信　難中転更難

大悲伝普化　真成報仏恩

文化五戊辰夏始閲此書[註]　盲亀浮木為懐雖拝写　恨原本魯魚多　希後覧英士訂正之

①石酉但し＝「若し」
②妄後に正報に＝「日」
③妄違ひ目＝「違日」
④石聞・見＝「見聞」
⑤石酉妄如に＝「は」
⑥石酉見を聞に＝「見聞」
　妄「聞見」
　如「見聞に」
⑦石酉如ずる時は＝「ずるは」
　妄「ずれば」
⑧石聞を見に＝「聞是」
　酉妄「聞見」
　如「聞見に」

註「文化五、戊辰の夏、始めて此の書を閲し、盲亀浮木の懐を為し、拝写すと雖も、恨むらくは、原本魯魚多し、希はくは後覧の英士之を訂正せよ」

洛西光明輪下南紀負笈杜門

大空舜禮　謹写

観経疏大意

○西山本 安井本　奥書

①観経疏大意抄

維時文化七庚午年七月十九日於金林蘭若

瑞恩拝写之

○如来寺本奥書

観経疏。大意大尾

観道拝写

私考云　元本洛西唐橋西方寺玄粲上人

皆皆ㄱ乎　断間或莨　料莨ㄱ乎　当當ㄱ乎

其外処々可附意後人乞訂

①囡「観経大意抄終」

跋

[註]此書也西山宗一流密秘中秘也眼者如金篦刮膜愚者少有差則破睛不可不誡不可誚邪悪夏虫不足語氷曲士不足語道已矣已矣

文化十一(甲)戌秋七月既望

住観音寺沙門照空観道識

註「此の書は、西山宗一流の密秘中の秘なり。眼者(眼を思ふ者)、金篦をもって膜を刮くが如し。愚者少しく差有れば則ち睛を破る。誡しめざるべからず。誚(そし)まざるべからず。邪悪(ああ)、夏虫は氷を語るに足らず、曲士は道を語るに足らず。やみなんやみなん。」